

ミステリ読書案内

2022. 8. 12 発行元

第385号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

歴史・時代ミステリその4

第380号に続いて「歴史・時代ミステリ」の第4弾。一人の作家、一作品のつもりで選んでいる。あまり有名でないものを取り上げようという心づもりなのだが。若者に古い作品をお薦めしたい気持ちもある。

ミステリと時代小説の境界は曖昧

「歴史もの・時代もの」と「ミステリ」との境界は非常に曖昧である。ノベルスなどを見ると「歴史推理」「時代ミステリ」などとジャンル分けのような表現が書かれているが、実際に読んでみるとミステリ要素はかなり希薄なものも多い。

中身のほとんどが歴史小説で、ほんのわずかな「謎」だけでは物足りない。「明智光秀がなぜ本能寺の変を起こしたのか」にしたところで、多くの作家が自分なりの解釈で歴史小説を書いている。「ミステリ」と名乗るだけの具体的な手掛かり

と論理の構築がなければ「推理した」とは言えないだろう。単なる「思いつき」だけではミステリとしては寂しい気がする。

歴史を描きながらも、一場面として「事件」が起きるのが望ましい。歴史上の人物が推理を述べあう展開は読んでいて楽しい。江戸時代の「捕物帳」系統は比較的ミステリに仕立てやすい舞台設定である。

歴史・時代ミステリは綿密な取材を元にして書かれているものが多い。作者の調査活動の足跡を辿ってみるのも良いかもしれない。簡単には手に入らない資料も並んでいる。作者の努力に感嘆するばかり…。

乾緑郎「ねなしぐさ」

2020年宝島社。6月に宝島社文庫に収録された。副題にあるように『平賀源内の殺人』を取り上げたもの。

江戸時代、老中・田沼意次そのものが登場してくる。主人公の平賀源内は失敗続きの中で、思うような成果を挙げられないまま、最後は殺人事件を引き起こすという描かれ方になっている。よくある名探偵などの設定ではない。史実に残されている部分をうまくストーリーの中に生かし、杉田玄白をはじめ源内を取り巻く当時の人物たちの行動が上手表現されている。ただ、前半の時間を飛び越えた場面転換が、今一つスムーズでないことや、少し混乱した文章が混じっているのが気にかかる。長崎で出会う遊女・志乃は印象的だ。

高橋克彦「南朝迷路」

1989年実業之日本社。雑誌『週間小説』に連載したものをまとめた長編。現在は文春文庫版が手に入りやすい。題名の通り「南北朝時代」（今はこの呼び名はあまり使われないようだ）の後醍醐天皇をテーマにした作品。鎌倉幕府の滅亡と室町幕府とを繋ぐ「建武の中興」の時期。歴史ミステリでもそれほど多く取り上げられるわけではない。後醍醐天皇と足利尊氏との関係や吉野の南朝と京都の北朝の関係など複雑な点が多く、全体を整理して理解するには難しい時代である。

本書の設定は現代。塔馬双太郎の大学時代の仲間である雑誌編集者の名掛亜里沙と作家になった長山作治が「後醍醐天皇特集」のために隠岐に取材に行くところからスタートする。名探偵の塔馬は途中から登場する。隠岐での調査とは別に、青森県の黒石市の板留温泉で後醍醐天皇の霊を慰める祭り「火流し」がもう一つの舞台になる。ここで、一人の若者が殺されているのが発見される。そして、後醍醐天皇の時代に作られたとされる幻の通貨「乾坤通宝」の名前も取りざたされるようになり…。伝説に纏わる謎を解くことができるか。

高橋克彦は『写楽殺人事件』を始めとして歴史絡みの作品が多い。ミステリではなく完全な時代小説もたくさん書いている。この『南朝迷路』まで手を伸ばす人はそう多くないかな？

泡坂妻夫「びいどろの筆」

1989年徳間書店。雑誌『問題小説』に連載したものの7編をまとめた短編集。現在は徳間文庫版が手に入りやすい。副題は『夢裡庵先生捕物帳』である。このシリーズはこの後『からくり富』『飛奴』と続く。また、泡坂の捕物帳には『鬼女の鱗』から始まる『宝引の辰捕者帳』シリーズもある。ともに本格ものとしての謎解きを中心に据えた作りである。

主人公は荒木無人斎流柔術の達人で、もの書きもする八丁堀定町廻り同心の空中楼夢裡庵先生。本書の巻頭にある第一話『びいどろの筆』では長屋に住む絵師の不審死に挑む。部屋で描いていた矢を射掛ける人物の絵馬からあたかも放たれたようにして、絵師が倒れていた。盆の窪に破魔矢のような矢が刺さっている状態。絵に描かれた人物が犯人のほうではないし…。事件を解くポイントとなる「びいどろの筆」はオランダから来たガラス製のもの。管の中に日本にはない顔料（インク）が入っていて墨をつけなくても続けて字を書けるという代物。夢裡庵先生は文人の先輩である以前先生の助けを借りて事件の真相に迫る。